

◆ E s s a y ◆

戦争の大義…亡き父との語らい

芝田 英昭

(福祉学科教員)

病室のドアの隙間から、背中を丸めて竹ひごに小刀を当てる父の姿が見えた。

父は、今春86歳の生涯を終えた。一昨年から体調を壊し、直腸癌であることが判った時は既にステージ4であったが、癌切除手術とストーマ（人工肛門）造設手術を受け、京都の北にあるホスピスで少しの時間生き長らえることができた。

「何作っているん」

「あー、これか。耳かきや。お医者さんや、看護師さん、死ぬの待っている人、みんなにやるんやがな」

いつの間に、大量の竹ひごを用意したのかは分からないが、ゆうに100本は超える竹ひごと格闘していた。その時は、何故父が「耳かき」を作るのか、私には理解できなかった。

私は、父との思い出はそれほど多くない。父は、家にはあまり寄り付かない人で、たまに帰ってくると、説教がましいことを垂れ、子どもながらに辟易した。それでも子どもの頃は、父が帰ってきて、一緒に夕飯を食べ、川の字になって寝るのは嬉しかった。

川の字になって寝た夜には、決まって父は、「がーおー」と言っていて、突然起き上がり何かにすぎる様な仕草をして、また眠りにつくのであった。私は、このようなことを何度か経験し、いつしかその理由が知りたくなった。

小学校の高学年であったろうか、ある日、父は戦争体験を語ってくれた。今思えば、その話は小学校低学年の時にも聞いていたのかもしれない。誰しも、小学校低学年の記憶など当てにはならないので、高学年の記憶だと思っていただけなのかもしれない。

「中国戦線やったな～。銃弾の飛び交う中、必死に三八式歩兵銃で応戦したな。数十メートル先の中国兵の頭に狙いを定めて、バーンて銃を撃ったんや。そしたら当たってな。中国兵のヘルメットが宙に舞って、あいつは倒れたんや。戦闘が収まって、土豪から出て敵を見たら、頭が半分なくなって脳みそがべろっと飛び出し血みどろになっとった。まだ、年端もいかない少年兵やったな～。わしと同じ年代やったろうに、可哀想なことしたわ」

父の中国戦線での話は、その後何度となく訊くこととなった。

父が戦争体験を語る時は、いつも視線が宙を凝視し必死に思い出し正確に伝えようとしていることが、私には理解できた。ただ、そこには常に母はいなかった。

ある時は、暗いトンネルの中で敵兵に遭遇した話をしてくれた。父は、数人の日本兵と歩兵銃を手にし、行軍途中にトンネルに入った。その時、暗い闇の中で一人の敵兵に遭遇した。距離が近かったので、銃剣での応戦となったようだ。数分後、父の銃剣の切っ先が敵兵の胸に吸い込まれていった。余りにもあっけない戦いだったので、人が死んだ感覚はなかった。敵兵の胸からは、止め処もなく血が湧いて出ていた。その時父は、何故この人を殺さなければならないのか、解らなかった。本当に自分にとって敵なのか、上官から敵だと言われただけで、彼には何の恨みもなかったのだ。

戦場では、常に恐怖と緊張が渦巻いていた。

塹壕で、銃を抱え頭上を飛び交う弾をやり過ごそうとしたが、上官の「突撃一」の一声で、震えながら飛び出し銃を撃ちまくった。父は、倒れる日本兵を見て、敵を狙って撃った弾の多くが、実は前に行く上官や日本兵に当たったのではないか、と思った。

「日頃、体罰をする上官を恨んでいた兵士は多かったさかいな～。どさくさ紛れに上官を撃ったかもしれんな～」と苦笑した。

ホスピスまでは、幹線道から少し山道を上らなければならなかった。なだらかな坂ではあったが、10分程の道のりは私でも息が切れた。

「わしな、献体しようと思うんや。医学生のために、この屍、使ってもらおうと思てな」

K大学医学部附属病院には、献体を希望した本人や家族が集う「S菊会」がある。父は、そのパンフレットを病室のベッドに広げた。葬式も簡単にしてくれ、いつ遺骨が戻ってくるか分からんから、位牌と遺影を揃えてくれ、と私たちに言った。私は何度かS菊会事務所に通い、父の献体の手続きを終えた。

ある夕方、またホスピスまでの道を登った。父に、献体の手続きを終えたことを伝えた。父は、「うん、うん」と何度も頷き私の話を訊いていたが、夕陽に映る父の横顔は、どこか寂しげだった。

その頃、母の認知症は酷くなっていた。若い頃の父の悪行を、所構わず言い触れて回る日もあった。私たち子どもとしては、聞くに堪えない醜聞でもあった。

母からも、戦争体験を聞かされていた。母が生まれ育った福井県敦賀市は、戦前には軍港と軍需工場があった日本海側の小さな寒村であった。敦賀は、終戦の1945年に、米軍から3度の空襲を受けている。第一回目7月12日の空襲は、「敦賀大空襲」と呼ばれ、記録では米軍戦闘機B29が127機来襲し、焼夷弾による波状攻撃を繰り返し、市民・軍人等110名が死亡したと言われている。第二空襲は7月30日で、米軍戦闘機P47が6機来襲し、日本軍歩兵と交戦したうえ、市民15名が死亡している。第三空襲は終戦の一週間前8月8日、B29が単機来襲し、軍需工場「東洋紡績工場」を直撃。学徒動員で作業をしていた女学生33名が死亡した。この時の爆弾は、後に「原子爆弾の模擬弾」であったことが明らかになっている。

母は、終戦の年の4月から東洋紡績敦賀工場で、学徒動員女学生として、軍用車両タイヤの一部や布製手榴弾の製造ラインで働いていた。真夏の8月8日お昼頃だった。空襲警戒警報が鳴る中、工場の外に出て天を仰ぐと、豆粒のような飛行機が1機かろうじて見えただけであった。皆、「また、誤報か」と思ったそうである。その途端、「ヒュー」という音が轟音となり、工場の屋根を突き破って、彼女たちの集団を直撃した。

「大きなカボチャのような鉄の塊が落ちてきて、友達を直撃したのや。さっきまで一緒に弁当食べた友達や、手や足や体があっちこちに飛び散って、見られるような光景やなかったわ。みんな、ワーワー泣いて。オロオロしとったんや」

母がこの話をしてくれたのは、私が高校生の頃だった。何故、それまで語ってくれなかったのかは判らなかったが、ずっと長い年月、あの空襲で亡くなった友に許しを乞うていたのだろうか。母は、親しくしていた友の名前をあげながら、「何で、あの子やったんやろ」と何度も首をかしげ、その光景を詳しく語った。

その日、姉から連絡があり、京都に急いで向かった。末の息子と私は、ホスピスに急いだ。父は、病室のベッドで静かに眠っていた。私たちは、父の死に目には会えなかった。母、父の子や孫たちが、狭い病室に集まり、父の遺体に向き合っていた。母は、父が亡くなったことは理解していたが、悲しみとは無縁の表情であった。

私は、その日が私の誕生日だとは判っていたが、言葉に出すまいと思った。父の命日と自分の誕生日が同じ日だというのは、些か気分の良いことではなかったからだ。でも、おかげで私は、「父の命日を一生忘れない」であろう。

その日の夕方、小さな病室で、ささやかな父とのお別れ会が行われた。看護師と音楽ボランティアの方が、約半年の父との思い出を嗚咽しながら語ってくれた。私たちの知らない父が、彼らの口から語られた。父は、「いつも気遣ってくれる優しい人」であった、らしい。家族、親族は、その話を訊いても、誰一人として涙しなかった。病院の方にとっては、実に不思議な光景であったのかもしれない。やはり耳かきは、病院のスタッフや入院患者全員に渡されていた。

母が敦賀空襲を語ってくれた日、父の戦争体験のことを何気なく訊いてみた。母は、呆れた顔をした。

「はあ、お父さんは16歳で志願して、海軍横須賀基地で訓練してただけで、外地には一遍も行ってへんで。中国、そんなん行ったことあるわけないやんか。阿保やな～。そんな話、真に受けたんかいな」と、高笑した。

父の戦争体験が、嘘だった。俄かには信じられなかった。あまりに具体的な情景を話してくれた「あれ」が、全部作り話だったとは、我ながら、してやられた、と思った。

川の字になって眠る父が壓される姿が、戦争体験と重なり、より真実味を私に与えていた。てっきり私は、人を殺した戦争体験が、父に悪夢を見せているのだと思っていた。

父の遺品の中には、海軍横須賀基地での生活を垣間見ることができる写真が幾枚もあった。セイラー服を着て水兵帽を冠る父の姿は、まさに「軍人」そのものであった。軍事訓練の写真は遠巻きに撮られたものしかなかったが、当時の状況を考えれば、訓練も「国防機密」であり残すことはできなかったのであろう。

志願の時期が、1945年の戦況が悪くなってからであったことを考えれば、軍事訓練も捨て身の訓練が強要され、年端もいかない少年兵の父にとっては、実戦よりも苦痛だったのかもしれない。日本軍は、日本兵や日本人を守ったのか、沖縄の地上戦でのガマに逃げ込んだ沖縄の人々が、日本兵から自決を選ぶよう強要された話は、枚挙にいとまがない。ましてや、同じ兵隊に対して、熾烈な虐待やいじめが横行していたことは想像に難くない。

戦争は、実戦に駆り出された兵隊だけでなく、訓練兵、一般市民にも大きな「心の傷」を残したのであろう。父は、その「心の傷」を戦後70年ずっと癒すことができず、悪夢を見続けそれを語ることで、一時の安堵を得ていたのかもしれない。

あの耳かきは、何だったのだろうか。悪夢を頭から掻き出すための道具だったのかもしれない。掻き出された「悪夢」を皆に見せ、戦争の悲惨さを知って欲しかったのかもしれない。軍国少年だった父も、最近の胡散臭い「戦争をする国」に突き進もうとする状況を憂い、まともになろうとしていたのであろうか。

戦争は、常に「国を守るため、国民を守るため」、いわば「防衛」を理由にして行われる。日本軍による侵略戦争も、アジアを欧米列強諸国から解放し、アジアの民を守るためだ、と高らかに謳っていた。これは、国民を騙すための常套句だ。

今年のお盆は、父からもらった「耳かき」を持って、お墓まいりをしよう。父は、あの世で悪夢から解放されたのであろうか。

「父さん、この世も『戦争法』という悪夢が、頭から離れないままやで。早くこの耳かきで掻き出したいわ……」。